



Vol.26 2023.12.15

茂吉記念館だより - 没後 70 周年記念 -



上：畫師茂吉手稿№.45 円山応挙「河柳鶴園」模写（部分）
下：円山応挙「河柳鶴園」（部分）画像提供／東京美術倶楽部

目次	・ 記念行事記録／没後七十周年座談会	2-9	・ 短信（掲示板）・友の会入会／活動支援募金のご案内 14
	・ 館長随想	10-11	
	・ 講座事業／特別展	12	
	・ 収蔵資料から - 円山応挙「河柳鶴園」模写 -	13	

没後七十周年座談会「晩年の斎藤茂吉とその短歌」

令和五年五月十四日、三友エンジニア体育文化センター（山形県上市市）を会場に開催した没後七十周年第四十九回斎藤茂吉記念全国大会における記念座談会第一部「晩年の斎藤茂吉とその短歌」は左記の内容で行われました。登壇者は雁部貞夫、小島ゆかり、佐佐木頼綱（司会）、中川佐和子の四氏（五十音順）。

佐佐木頼綱（以下佐佐木） 皆さんこんにちは。「心の花」という結社で短歌を作っています佐佐木頼綱と申します。「心の花」、佐佐木信綱という人物が百二十五年前に作った短歌結社です。そして、ぼくは信綱のひ孫になります。斎藤家もそうだと思うのですが、名前が似ているんですね。ぼくのひいおじいちゃん、信綱、信じる綱、そしてぼくは頼綱、頼る綱と書きます。そして父が幸綱、幸せの綱、弟が定綱、定め綱、と言います。よく混同されて、ぼくが壇上にあると「意外と若いんですね」と言われたり、ひいおじいちゃんに間違われて「まだご存命だったんですね」とか言われたりしています。さて、今日は「アララギ」の流れを汲む雁部先生、中川先生、そして北原白秋もつと踏み込むと新詩社の流れを汲む小島先生がいて、観潮楼歌会に紛れ込んでしまったような、ちよつと緊張しながら浮き足立っているんですけども精一杯頑張ろうと思います。よろしくお願いいたします。

それでは第一部のテーマは「晩年の斎藤茂吉とその短歌」についてです。歌人は第一歌集に光が当たりやすい傾向があります。茂吉も『赤光』に光があたることが多いのですけれども、本日は没後七十周年イベントということで、茂吉が晩年にどのような作品を作っていた、その背景はどういうことなのか、そういったことを各講師の先生に紹介していただくと思います。最初に取り上げるのは『小園』の歌となります。

◆『小園』の短歌

ぬばたまの夜はすがらにくれなゐの蜻蛉のむれよ
何処にかねむる 中川佐和子選

星空の中より降りむみちのくの時雨のあめは寂し
きろかも 小島ゆかり選

このくにの空を飛ぶとき悲しめよ南へむかふ雨夜
かりがね 雁部貞夫選

松かぜのつたふる音を聞きしかとその源はいづこな
るべき 佐佐木頼綱選

佐佐木『小園』の編集後記には、「昭和十八年十九年の作から平和なものを選び、それに山形県金瓶村疎開中の大部分の歌を加へて一巻としたものである」と記されています。後期三歌集の中で一番見落とされがちな歌集かと思えます。それでは先生方よろしくお願いいたします。

中川佐和子（以下中川） 皆さんこんにちは。中川佐

和子です。私は「未来」というところですから、「アララギ」の流れの中です。斎藤茂吉という歌人をずっと見上げるような思いで歌を作ってきました。そして茂吉の歌のどこに一番惹かれるかという生命感なんです。深く根を張ったような生命感が茂吉の歌の魅力で、そしてカオス、つまりわからなさというところがとても大きな魅力です。そこに根源的な何かがあった、歌に時々感じる情動というようなものがあるのが茂吉の歌の広がりとなっています。とてもいいと思ってます。ここにあげた（ぬばたまの夜はすがらにくれなゐの蜻蛉のむれよ何処にかねむる）。この歌について、（ぬばたま）というところから始まって（蜻蛉）の（くれなゐ）に歌が展開されていくんです。この歌にひかれるのは色彩で、そこから感じられる茂吉の心の在り様というのがとても魅力です。そして四句切れで（何処にかねむる）ということは一気に思いをたたみ込んでいくんですね。とても技巧的だと思います。この間の中の（蜻蛉）の（くれなゐ）というのは、陽の光の中で見る（くれなゐ）ではないわけですね。これは茂吉の全身で、心で感受している見えていない、目にしていない（くれなゐ）の色なんです。言ってみれば見えている景を詠った方が迫力があるかと思ってきました。しかし、ここに異様な迫力があつてこの景色を詩的に構築してらんです。（蜻蛉のむれよ）と詠んでいるので、この（くれなゐ）は平

垣ではなく、そして空間の厚みがあり、《蜻蛉》が眠るのは木の枝とか草です。一箇所に固まっているわけではないのです。そこに空間を集められて生み出しているものがイメージとして私の中では膨らんでくるんですね。そこにとってもシュールな感じがあつて、ある何か怖い感じがする。この歌の魅力というように思っています。小島ゆかり（以下小島） 皆さんこんにちは。小島ゆかりです。山形県には大変深い縁をいただいて、毎年のように通っている私ですが、また今年こうしてこの場所です。皆さんにお目にかかれることを本当に嬉しく思います。今日は「晩年の茂吉とその短歌」ということなのですが、先ほど頼綱さんから少しお話がありました。ただ、「小園」という歌集は制作年では昭和十八年から二十一年です。そうするともうピンと来られると思いますが、日本の歴史の大きな転換点の昭和二十年がこの間に挟まるのです。ですからこの制作時期の間に茂吉は、二十年の四月ですが、ふるさとの金瓶村へ疎開をして、その地で終戦を迎える。そんな歴史を背景にしながら、そして一方では北杜夫さんがお書きになった『茂吉晩年』という本を何度目になるか分かりませんが、読んできましたけども、日常の人間の茂吉の姿、その両方を視野に置きながら作品を読んでいくと非常に面白い色々な魅力に気づくことがあります。その中でこの歌を選びました。（星空の中より降りらむみちのくの時雨のあめは寂しきろかも）。茂吉は本当に幅の広い歌人です。みもふたもないような歌



朗読者の中川佐和子氏と小島ゆかり氏

もあればとても奇妙な歌もあり、とてもシュールな歌もある。そしてこんなに美しい歌があるんですね。近代現代短歌で美しい作品がたくさんありますけど、とりわけ美しい歌じゃないかと前から好きな一首です。（星空の中より降りらむみちのくの）。晩秋から初冬にかけて、おそらくこの歌は十一月頃の歌じゃないかと前後の歌から想像しますが、気候・天候が激しく移り変わってまだ星空のちよつと晴れてるような夜空から、たちまち時雨が降ってくるのです。その星空の名残がある中から降ってくる（みちのくの時雨）のなるとして、青々としていることでしょう。（寂しきろかも）という結句ですが、大変古代的な使い方だと思います。

選べば、神話の記紀歌謡にまで遡ることが出来ます。（ともしきろかも）という例がすぐに思いつきますけれども、《ろかも》に意味はないと考えてもいいかもしれせん。あるいは《ろかも》とまとめて詠嘆という風に大雑把に鑑賞すればいいと思うんですが、その意味は横に置いてこの《寂しきろかも》という音です。《き》音を中心にしたこの音が星空の中から降ってくる（みちのくの時雨）のイメージととてもよく響き合う、そんな不思議な面白さまで伝わってくる歌だと思いましたが、この時期は敗戦の打撃、精神的に深い打撃を受けながら、同時に自分自身の体が次第に老いていく孤独、心身の両面の孤独を深く抱えていた。一方で戦争の時に戦争に関連する歌がたくさんあるんですけど、それは一切歌集には入れていない。そうした背景を幾重にも味わいながら読むと、一層この歌の美しさが本当にしみじみと身にしみてくる気がします。

佐佐木 雁部先生お願いします。

雁部貞夫（以下雁部） 私が選んだ歌、これは茂吉の歌い方の特徴的な色彩が非常に強い歌ですね。どういふことかと言うと、この歌のとらえ方が非常に大きくて、強い。《このくにの空を飛ぶとき悲しめよ南へむかふ雨夜かりがね》空を雁が飛んでいるそれに呼びかけた形になっています。《このくに》というのは、狭くとする人は山形金瓶の空と捉える人もいますし、戦争に負けたばかりの日本、そういう風に捉える人もいます。これはその人によって自由にとつていいと思います。とにかく日本は敗戦から間もないわけですから、それで土屋

文明という歌人がいますね。茂吉と「アララギ」を二人で背負って立ったもう一方の旗頭で、この人に私は直接習ったんですが、この人のある時の話に、茂吉は山形で非常に孤独な生活を送ったわけですが、茂吉の歌にとって孤独であったことが歌の上では非常にいい歌をもたらした。『小園』それから次の、『白き山』に塊のようにして出来上がったと、これはやっぱり孤独の生活をそこで頑張つて耐えて生きたからだという捉え方をしているんです。土屋先生も故郷の遙か北の山奥で半分自炊生活みたいなことをしていて、そのこととおそらく重ね合わせてしみじみ言われた話だと思うんです。ただ、土屋先生の場合はもっと知的な歌だから揺れに乏しいんです。茂吉の場合こういう風に「バーン」と歌の頂点まで読み切っちゃうわけだ。そこが、文明先生ごめんなさいって言いたいくらいなんだけど、知性が邪魔をしちゃう。土屋先生の歌はどうしてもそこまで行かないんですよ。土屋先生も自分で言っています。茂吉という破天荒な個性があつて初めてそういう境地が開けたんだと。だから、茂吉は百人のうち九十九人が知らないことを知ってる。しかし九十九人が知ってることを知らない、そういう人間だと。こういう振幅だね、あの生涯にも起るし歌の世界でもありうるわけですね。まあここまでにしておこうか。ダブルイメージでカリ(雁)ってというのがあの茂吉の歌の魂の鳥の根源になっ

ている。そういうことを、一応言っておきます。

佐佐木 ありがとうございます。ぼくも選んできた歌を紹介させていただきます。(松かせのつたふる音を聞きしかその源はいづこなるべき) 松の音に耳を傾けながらその源を探しているという一首になります。松風の音の源に心を廻らせている、今後どうするべきか手探りの気持ち、あとは敗北感や喪失感といったものを噛み締めている歌と思いました。苦悩とか困難の源を問う気持ち、深い自問自答、そういったものを想像しました。松風の音という時点でもかなり寂しい表現だと思ふんですけどもそこで終わらないで、その源を探している、この展開がいいと思いました。わざと疑問を抱いて、わざと問うパターン、『古今和歌集』にもこういうパターンがありますが、そういった構造がとられているかと思いました。寂しさだけではない、技巧だけでもない、ギリギリのところ両者をぶつけ合っている、そんな印象を受けながら読ませていただきました。以上が講師の引いてきた『小園』の歌となります。お互いがあげた歌については最後に少し話し合う時間を取っておりますので、続きまして『小園』の次の『白き山』の歌に移らせていただきます。

◆『白き山』の短歌

最上川の流のうへに浮びゆけ行方なきわれのころの貧困

中川佐和子選

幻のごとくに病みてありふればこの夜空を雁が

かへりゆく

小島ゆかり選

かん高く「待避！」と叫ぶ女のこゑ大石田にてわ

が夢のなか

雁部貞夫選

追風にややかたむきて行く舟を高きに見れば恋

しきに似たり

佐佐木頼綱選

佐佐木 昭和二十年八月に刊行された歌集となりま
す。大石田時代に読んだ八二四首、全集では八五〇
首が収録されています。後期の傑作、晩年の代表歌集、
そんな風に呼ばれている歌集となります。

中川 私は全集、そして昭和二十年代の「アララギ」
を一度読み返してきました。それと『子規短歌合
評』ついでなのは昭和十五年から十八年まで「アララ
ギ」に掲載になったものを昭和二十三年三月に刊行に
なっているんですね(註:斎藤茂吉と土屋文明の編著・アラ
ラギ叢書第一一四篇)。ちょうどこの『白き山』は昭和
二十四年八月刊行です。茂吉の評として、子規のは
がき評がなんかで、言語が心のゆくまま運ばれて自由
自在な点に注意すべきである、と述べているんです。茂
吉はそういう形で子規を評している。ここに茂吉の在
り様、昭和十八年あたりにそういう言葉があつて、こ

の歌を読んだ時にハッとするんですね。(この頃の貧困) という言葉が非常にインパクトが強くて、こういう言葉の強さを感じさせる。(貧困)、心が貧しいという風に言わないで心という言葉と貧困という言葉結びつけているんですね。そういう歌い方が茂吉の特徴となっている。茂吉らしい歌になっていると思うんですね。『白き山』っていうのは敗戦の悲傷からの回復という風に言われていて、先ほどの『小園』もちょうど私と小島さんと雁部さんも、同じ一連「金瓶村小吟」というところから歌を選んでいきます。そして全集の中に「最上川」についての随筆(昭和十三年六月二十二日東京日日新聞)があつて、その中には、自分はまだ少年時代に東京に出ているので最上川というのはたまたま懐かしい川であつた、っていう風に書いています。それから小学校の仲間たちと学校の関係で行つたということが書いてあつて、酒田に行つた時に非常に珍しい景として最上川が酒田の海に流れていくのを捉えているのです。何か正体の知れぬものを目前に見たっていう言葉があるんですね。だから少年の頃そう捉えていた最上川っていうものは、茂吉にとって何であるかということなんですけれども、最上川の歌を読んでいくと、茂吉と最上川はもう一体化している感じなんです。それから歌の(行方なき)っていうところ、(浮びゆけ行方なき)ここから行くところがないっていうんですね、そういうようなところに茂吉の心の漂泊みたいな思いも、どこかにあるんじゃないか、とても深い歌だっと思っています。

小島 先ほどと同じように、この時の茂吉がどんな境遇であつたか、どんな心境であつたかということを想像しながらやはり読んだわけですね。そうするとこの『白き山』の時代っていうのは、先ほどに続く昭和二十一年から二十二年ですね。二十一年の一月ぐらいに大石田の方に疎開していて、そして間もなく早春というようになまだかなり寒かつたところ、三月から九月まで六ヶ月間肋膜炎になります。かなり重症になつたようで、死んじゃうかもしれないというようなことも思ったし、周りもそんなことを心配した、そんな六ヶ月間を含んでいる歌集ですね。金瓶の時は妹さんの嫁ぎ先にお世話になつたわけですが、大石田では皆さんよくご存知のようにお弟子さんの板垣家子夫さん、あるいは二藤部兵右衛門さんなんていう人にお世話になりながら少し気を使うような、気楽なような、そんな感じでした。茂吉の素の部分がよくつらいでくる、それが北杜夫さんの本の中にもよく出てきました。しかし私が選んだ歌はちよつとその病床にあつた時の歌ですね。(幻のごとくに病みてありふれば、この夜空を雁がかへりゆく) (幻のごとくに病みてありふれば、この夜空を、ここまでする大きな一つの息でゆつたりと詠むんですね、ところが結句だけが(雁がかへりゆく)と濁音の助詞「が」を選択して字余りになつている。茂吉の歌の面白さは言い尽くせないほどあるんですが、その大きな一つにやっぱり、韻律の面白さっていうものがあつて、妙に大きかつたり妙に滞つていたり妙にかつちりしてたり、なんとも言えない韻律の面白さ。この歌の結句の(雁がかへりゆく)ですが、雁はガンとも読むし、さつき雁部さん

がお出しになつた「かりがね」という読み方もしている。二音だとしても、カリとガンと両方あつて、助詞も(助詞なし)だつて行けますよね。定型で「カリかへりゆく」でいいわけで、助詞も「が」でもいいし「は」でもいいし、場合によっては「の」でもいいっていうようなそういうことを考えていると、八バターンぐらいあるんですね、選択肢が。その八バターンの中から茂吉がなぜこの(雁がかへりゆく)を選んだか、考えれば考えるほど面白いことで、ここにやっぱりこの時の茂吉の心境が関わつてくるんじゃないかなと思うんですね。同じ頃に書いた随筆の中に、病んでいる時に若い青年、若い友人がお見舞いに来てくれてその人がちよつと、帰雁、春に帰つていく雁の話をする。その青年が、よくわかんないけど雁は最上川の川の流れを目当てに飛ぶんじゃないか。そしてこの土地というのは春が来たら一気に春が来るからね、その雁の声を聞くと、春が来たことが身にしみるって言うようなことを話しているんですね。そして、それは夜中なんだと。ちよつとその青年と話した時も雁が帰つていくのは夜中で姿は決して見えないんですね。姿は見えないけど声を聞いた、それがこの歌に反映されていて、(この夜空を雁がかへりゆく)と、この歌の面白さですね、姿は見えないけど、作者はこういうのは声だけなんです、姿は見えていない。作者はといえば(幻のごとくに病みてありふれば)という状態だった。だからこそ(雁が)という。「カリは」というくつきりした音ではなくて、「カリの」という弱い音ではなく、ましてや「カリかへりゆく」という助詞を省いたなめらかさでは到底表現できなかった。やっぱり(が)という

ちよつと濁った助詞を選択して、ですけど「ガンが」では濁りすぎますから、「カリがかへりゆく」と選択したんじゃないかと自分なりに推測していったんです。その過程がいろいろ心に残っていてこの歌をあげました。

雁部『白き山』は秀歌のかたまりみたいなのですから、本当はぼくが好きなのは（ながら）てあれば涙のいづるまで最上の川の春をしまむ）なんです。今日はやはり、茂吉は疎開者ですからそれを反映した歌です。（かん高く「待避！」と叫ぶ女のこと大石田にてわが夢のなか）夢の歌が非常に多いです。眠りが浅かったんですよ。ぼくはそういうことないからね。えーとね。横道入りそうだな。実はね、昨日の夜眠れなかったんですよ。興奮しちゃって、久しぶりに山形に来たっていう興奮があつてね。それと大勢の人の顔を見るのが久しぶりだったもんだから、その期待で以つてね。それと今日集まつてる人で終戦の時にぼくと同じかまうと上の人の比率が本当は知りたかったんだけど、こつやつて見るとほとんどぼくと同じかまうと上ぐらいの人だと思えます。終戦の年に当時の国民学校の一年生に四月に入ったわけですから、実際この（待避！）という言葉はぼくにとつてはすごい身近なんです。当時私は石巻の郊外のまあ半分農業半分漁業やつた集落到に住んでて国民学校へ通ったんですが、その集落から十人ばかりの男の子が隊伍を組んで峠の上にある小学



登壇者の雁部貞氏と佐佐木精嗣氏

校へ行くんですよ。約一里、大抵下駄履いてましたね。靴がないんです。そして、終戦の年の五月のことでした。か、隊列組んで歩いてたら、後ろの海の方からなんか妙な音がしたんですよ。そして、後ろを見たら、艦載機が一機飛んできた。それを見て一番先頭にいた上級生が「待避！」って号令かける。そうするとぼやぼやしてる奴は一人もいない。それで、鞆持つてね右側がクヌギの林だった。昔は炭をとったから、枯葉がふわふわしていいんですよ。そして、そこに飛び込む。左側が

崖になって下には水田があるから、見つかつちゃうわけですよ。だから、みんな林に飛び込んだ。そうしたら、いや、忘れられないですね、あのキーンという艦載機の爆音。それが峠の手前で反転して、石巻か仙台に爆弾落とすに行った。それが五月。そして、そのとき東京では青山あたりが焼けて文明さんの家と茂吉さんのところと両方焼き出される。そんなことを知ったのはもちろん、最近のことなんですけど、それをこの歌を見て、思い出したんです。ここで（待避！）って言ってる女の人ねおそろく戦時中かまあ戦後も実際そういう言葉が発しながら路上を歩いてた人じゃないかと思う。茂吉は精神病学者だからそういう人に特別な印象強く抱いたに違いないんですよ。印象深く歌われたんじゃないかなと、私の推論で想像です。それに茂吉は夢の中でそういう場面をはつきり歌ってますからね。勉強の材料になりますから皆さん夢の歌を拾って読むといいです。すごいエロティックな歌も。大きな声で言えない。以上です。

佐佐木 ありがとうございます。ではぼくが引いてきた歌も。（追風にややかたむきて行く舟を高きに見れば恋しきに似たり）強い風を受けて進む舟が描かれてるわけですけども、それが恋しい人の背中のように読めました。舟がどんどん遠ざかっていく、追い風で遠ざかっていく、それに連れて自分の恋しい人も遠ざかって

て行く、そんな歌なのかなと思って読ませていただきました。抽象的な歌だと思っただけです。ただやっぱりいい歌だなと思ったのは（やややかたむきて）この部分がしつかりと描いてるからなのかなと。この歌の成功失敗を分けるギリギリのところをしっかりと押さえている歌なのかなと。読んでいて、そうかこうやって作ればいいのかと勉強させてもらいました。続きまして茂吉の遺歌集『つきかけ』から選ばれた歌を読み上げて解説を伺おうと思います。

◆『つきかけ』の短歌

地下鉄の終点に来てひとりこつまぼろしは死せり
このまぼろし 中川佐和子選

暁の薄明に死をおもふことあり除外例なき死とい
へるもの 小島ゆかり選

いつしかも目がしづみゆきうつせみのわれもおのづ
からきはまるらしも 雁部貞夫選

いかづちのとどろくなにかがよひて黄なる光のた
だならぬはや 佐佐木頼綱選

佐佐木 この歌集は茂吉が昭和二十八年に七十歳と九ヶ月で亡くなりその翌年にお弟子さんたちによって刊行された最後の歌集となります。『白き山』とだいぶ違う歌が多くて、上田三四二さんからは、実にどうでもいいう歌集とか、『白き山』の付け足しのようにとか、ぼつさり切り捨てられています。また小池光さんからは、これが面白いんだとか、茂吉の幅なんだとか評価が提示されたそんな歌集になります。

中川 この紹介されたように『つきかけ』は評価が揺れ

た歌集だという風に思います。岡井隆さんもこの歌集が一番好きだっておっしゃるんですね。そして、私があげた歌は（地下鉄の終点に来てひとりこつまぼろしは死せりこのまぼろし）です。（地下鉄）という言葉が入っていて、（地下鉄の終点）っていうのがとても印象的なところですね。（地下鉄）という限られた空間で閉ざされた感じの空間でその（地下鉄）の薄闇を抜けたところで、独り言を言う。幻は死んだって言うんです。（まぼろし）と（まぼろしは死せり）といったところがやはり茂吉の言葉のインパクト。茂吉の言葉への愛着、というより執着ですね。そういうところがとてもよく出ていると思います。そして昭和二十五年っていうと、歌誌「アララギ」の中で他に地下鉄の歌があるかなと思っただけで読み返してみたら、こういう一首があるんですね。（軽蔑せられたること知らずして地下鉄の中に大きな声あぐ）。これは昭和二十五年の二月の歌なんです。この歌は（まぼろし）をどういう風に読むかで解釈が違ってくる、というか、広がりとなっているところだと思っただけです。いろいろと解釈されてきましたが、私はこの歌というのは若い頃から、というか終生持っていた女性への憧れと読んでもいいんじゃないかと私は思っただけです。（まぼろしは死せりこのまぼろし）というこのフレーズが強いんですね。そして茂吉は二十五年あたりになつてくると歌がちよつと減ってくるんです。昭和二十五年の七月号ぐらいいには減って、二十六年、二十七年になつてくると歌が一首とか二首つてなる月も出てきます。だけど、その中で驚く

ことに昭和二十六年の四月号の「アララギ」に（我が色欲いまだだ微かに残るころ渋谷の駅にさしかかりけり）というよく知られた歌がここにあるんですね。昭和二十六年四月のこの歌については北杜夫さんが、茂吉は二十六年のこの頃はもう外に頻繁に出ていないからこれは想像の歌ではないかというようにことを書いてらっしゃいました。だけど（我が色欲）なんていう言葉を使っているところがいかにも茂吉で、言葉がそのままずばりなんですね。そういう言葉の強さも同じこの（まぼろしは死せりこのまぼろし）っていうときの心の中の複雑な思いついていうのがそこの中に見えてきてとても魅力がある歌だと思います。

小島 その評価が分かれている『つきかけ』ですが、私は自分の選んだこの歌一首があるだけでも『つきかけ』は名歌集であると強く信じています。茂吉が東京へ帰ってから死を迎えるまで、昭和二十三年からほぼ二十七年までの作品が入っています。（暁の薄明に死をおもふことあり除外例なき死といへるもの）。若い頃は（除外例なき死）というのは、茂吉が医師であったからこそ出てきた発想なんじゃないかと思ったりしてはいたんですね。ところがだんだん、自分自身が高齢者に、ワクチン接種券がもういち早くやつてくる年齢になると、その死というものも、もちろんすぐ死ぬとは思いませんけど、やっぱり確実に近づいている気配がある。しかし私たちはみんな生きてますから、生きてる者にとっちはどんなに愛する人や家族が亡くなった時でも、それはやっぱり自分の死ではなくて他の人の死なんですね。

死というのは、いつも生きている者には他者の死であつて、だけれど除外例なくやがて必ず自分にもやってくる。その気配というのは本当に確かなもので、恐ろしいものであり不思議なものだという風に思います。こんなに冷徹でこんなに平等というか、世の中不平等だからですけど、これだけは本当に平等。平等故に何かとても冷え冷えとした感じがします。(「暁の薄明に」がとて面白いと思うんです。黄昏ではなく暁。今日という日がまだ始まっていないんですね。もしかしたら今日という日がまだ始まっているでしょう。それから今日という日があつても、次の日、明日の朝という日がないかもしれない。その暁の、一日の始まるまだ未知である時間帯に、これを感じるということに何とも言えない、現実感というんですかね。本当にそう思ったんだろうなっていう実感のようなものを感じます。そして(おもしろいことあり)の第三句が二音の字余り、七音になつていゝるんですね。ここは非常に深くたゆたうように、あるいは衝撃的に、その両方の感情、いや感情ではないか、何か両方の感覚を持つてやつてきた思いだからこそ、ここが七音になつたのではないかなと思うんですね。

藤部 私のおげたこの歌が『つきかげ』の歌集の最後の歌なんです。(いつしかも日がしづみゆきうつせみのわれもおのづからきはまるらしも)これを讀んだときに、私は『つきかげ』っていうのは最後

の方は非常に問題が多いとされてまして、これは実は「アララギ」の昭和二十七年の二月号になぜか一首だけボツンと出てるんです。その頃はまだぼくは小さいから「アララギ」に入ってるわけじゃないんだけど、その後この『つきかげ』を讀んだ時になんかちよつと出来すぎじゃないかと思つたんですね。前のお二方が死に関する歌をひいておられて、おあつちえ向きにここで辞世の歌がでてくるというのは、偶然そうなんですかね。いい歌なんだけど、なんとなく舞台装置が全部揃つちやつてるような感じ受けたんです。それで私は「アララギ」の先輩からこの歌集については編集に携わつた柴生田稔という先生からちよつと聞いたけど、問題がとにかく多い歌集だからそのつもりで読めよつて言われたんです。だからかなり大人になるまで少し疑つていたんです。ところがね、その後いろんなものを讀んだ時にこういうもの見つけたんです。北杜夫さんの話によると昭和二十七年はもう普通の人の感じじゃなくなつて歌なんかとんでもないよ、つてそういう書き方されてるんですよ。ある時、輝子夫人が茂吉の寝床のところでメモを発見して、それでそのメモにこの歌が書いてあつたことを北杜夫さんが書いてるんです。それが「アララギ」に一首でた。それでそのとき、最晩年のさつき中川さんがあげた歌だとか、もう一首同じように傑作が出てるんですよ。北杜夫さ

んがそれを見て、人間だからなんか急に昔のことを思い出すことがある、ありうる、とこれはあの茂吉自身の歌だと、それは茂吉のためにあつてよかったと言つてます。それで茂吉の歌つていうのは形、器がしっかりしてるので、崩れないんですよ、ぼくに言わせるとね。だから死ぬまでそれが残つてたんじゃないかと思う。ぼくら現代短歌の人はだいたいへなへなします。それはしょうがない。ただ、茂吉は器がしっかりしている。もうこれは絶対。だから中には形式的な歌「……」なりにけるかも」ということになるわけ。けども總体的に歌の器がしっかりしてるから、なかなかこねれないわけですよ。そういう特徴を最後まで持つてた歌人だろうと、そういうふうにしてほくもこの歌が最後にあつたのはよかつたと思います。

佐佐木 ありがとうございます。ぼくが引いてきた歌も紹介します。(いかづちのどとろくながにかがよひて黄なる光のただならぬはや)『つきかげ』を讀んでいると茂吉の死がだんだん近づいていくような感じがして寂しくなる歌集でした。ぼくの引いてきた歌は雷鳴と稲妻の激しさその一瞬を描いた歌になります。三句目までは光の微妙な違いを描いていて、「アララギ」らしい表現の歌なんだろうなと思つて讀み始めたなら四句目以降それを放棄して主観の(ただならぬ)そして詠嘆の(はや)で受け止めていて、何か放棄してしまつてい

ような印象を受けました。あの雷鳴の中を黄色い光が舞う様子を自分の命の終焉を迎えつつある中で感じている歌なんだろうなと思いました。死にま向かって強烈に揺り動かされている感情を描いているのかなと。茂吉の静と雷の動を合わせている。茂吉の死と雷の生を合わせて対比しているそういった歌なのかなと思いました。生のエネルギーと死の覚悟が同居している歌、挽歌として読んで、いい歌だなと思つて引かせていただきました。あとわずかですが、お互いの歌や、感じたことなどありましたらお話してください。

中川 さつき 雁部さんが器がしっかりしてると言うことを言われてました。そして、茂吉の人間性っていうのが非常に濃いなと思います。現代短歌と比べると言葉の力の強さが茂吉の内面と結びついていて、その強さがあるっていうのは魅力として惹かれるんですね。それから言葉と言葉の結びつけ方、言葉の見つけ方に、茂吉の歌に学んでいくべきところだと思います。例えば『小園』の雁部さんが引いた『雨夜かりがね』という言葉とか、それから小島さんの『寂しきろかも』っていうこういう言葉の使い方なんかそうですね。それから『白き山』。雁の歌を小島さんがあげてらっしゃいましたけど、私があげた歌で『このころの貧困』、そして『除外例なき』なんて表現も非常に魅力的だと思います。茂吉の歌というのは、心の中にずしんと響いてくるのがあってそういう迫力って短歌を作るうえでもとても大事じゃないかなと思います。

小島 茂吉の歌の面白さとか、いい意味でのいびつさと

か、大きさとか深さとか、その全ては茂吉の人間の面白さだと思いますね。茂吉の真似をしようと思つたって、人間が茂吉じゃない限り絶対真似できない。けれどもどうしても真似したくなっちゃうような魅力があるのが茂吉だと思います。その人間の魅力について、これは歌と関係ないんですけど、先ほどの北杜夫さんはじめ斎藤家の人々が、茂吉について輝子さんについて色々お書きになって、そのことで私がとても感心するのは、斎藤家の皆さんは決して茂吉をかくよく見せようとしないうですね。なんかこう美化しようとか偉大だつたつていう、そういう方向性でお書きにならない。茂吉はこういう人間だつたんだぞ、輝子はこういう人だつたんだぞ、と言うような非常に興味で生々しい、でもそれこそ人間じゃないか、これこそ茂吉だつたんだ、っていうような姿を書いてくださっている。それが私たち歌人にとっては茂吉の歌は真似はできないですけども、茂吉の歌の秘密とか謎とか、そこにほんのちよつと近づくと、なにか扉のようなものを開けてくださるんです。それをしみじみと思つて、今回いい機会を与えていただいて、そんな本をあらためていろいろ読んで参りました。ありがとうございます。

雁部 じゃあ一つだけあの中川さんの『ひとりごと』の歌、『まぼろしは死せりこのまぼろし』の歌、ぼくは茂吉の合評というのを『アララギ』でやつて、それ本にする時、校正手伝ったもんだから思い出がある。『まぼろしは死せりこのまぼろし』というのは出典がはっきりしててんです。ドイツのハルトマンっていう美学者の、詩歌

や文章を茂吉は暗誦してたんだね。それをそのままそのまま自分流に翻訳していた。だからなんとなくヨーロッパっぽいような内容でちよつと日本人のと違うよね、『まぼろしは死せりこのまぼろし』。普通なら、下に『は』とか入れたくなるけど、そこでアツン切った。そこに目をひかれるところで、なかなか面白い歌です。そのことも出典しらべてその本に入れてあります。(註：土屋文明編『斎藤茂吉短歌合評 下』明治書院 昭和六十年)

佐佐木 中川先生、小島先生、雁部先生ありがとうございます。色々、面白い発見があったなと思います。雁部先生がおっしゃられていた茂吉は九十九人が知らないことを知っている、九十九人が知っていることを知らないということに、ぼくはなんかしつくり来て、茂吉の歌には発見が多くて、「ああ、こんなことがあるのか」と読んでいて楽しくてなんか自分の人生とか生活も楽しくしてくれる、そんな歌だと思ふんです。今日三名のお話を聞いてその辺が納得いくような気がしました。自分の生活を豊かにしてくれる非常にいい歌なんだなうなと思います。

- 雁部 貞夫(かりべ、さだお)、歌人・新アララギ
- 小島 中川(こじま、ゆかり)、歌人・コスモス
- 佐佐木 頼綱(ささき、よりつな)、歌人・心の花
- 中川 佐和子(なかがわ、さわこ)、歌人・未来

随想あれこれ

茂吉の歌

斎藤茂吉の歌はとにかく実際に即して自由自在で面白。

最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふふとなりけるかも 『白き山』

のように、内容があり堂々とした声調、格調の高い歌があるかと思うと

一様のごとくにもあり限りなきウアリエテの如くにもあり人の死ゆくは 『つきかげ』

というような人間のつびきならない真実に迫ります。またある時は

あかがねの色になりたるはげあたまかくの如くに生きのこりけり 『小園』

と詠います。表現が自由自在で、まさに自照の真実、作歌の原点です。

作歌の用語でも同様で、対象が同じ景観に対してさえ用語が同じではありません。思い付きでそうしているかと思ひ、よく調べてゆくと、きちんとした根拠によります。これが茂吉の作歌だと改めて頭を垂れることになりま。

たとえば同じドナウ河を「ドナウ」とも「ドウナウ」とも詠い、どちらも相当数の歌があります。歌集『遍歴』のよく知られた「ドナウ源流行」一連の最初の歌は次のようなものがあります。

中空の塔にのほればドナウは白くきらひて西よりながる

あひ合ひてドナウとなるところ見つ水面は白日のかがやきに

同じ一連のすぐ後には

なほほそきドナウの川のみなもとは暗黒の森にかくろひにけり

大き河ドナウの遠きみなもとを尋めつつぞ来て谷のゆふぐれ

という具合で、一体「ドナウ」なのか「ドウナウ」なのか。ドナウは「川」なのか「河」なのかも気になります。

一見、奇妙に感じますが、これも実際に即していることがわかります。何しろドナウ河は十か国を流れ黒海に注ぐため、様々な言い方が生まれるのは自然でしょう。更にドイツでは方言なども立派なドイツ語として認められているといえますから、こういう用語も茂吉にはごく自然でありました。ドナウは英語圏ではダニューブ河であり、私の所持するドイツ語辞典には「ドーナオ」となっています。

茂吉の生地の中で、縁が深く秀歌の多い蔵王についても似た例があります。

ひむがしに直に向ふ岡にのほり蔵王の山を目守りてくたる 『小園』

大石田いでて上ノ山に一夜寝つ蔵王の山いまだ白きに 『白き山』

同じ蔵王が「ソウオウ」とも使われ、他にも何首か同様の例があります。地元の古い言い方（方言）かと思われ、私は山形県上市市に行くたび、古老に尋ねたりしましたが、そんな言いかたはしないということ、長く気にかけて居りました。

用例は結局謡曲にありました。『嵐山』の「蔵王権現」云々のところは「ソオオオゴンゲン」と詠いますから、茂吉は機敏に聞きとめ、改まった感じを可と生かしたのでしょう。

茂吉夫人が謡曲を習って居りましたから、機敏に聞きとめたとも考えられます。

つまり茂吉は自由奔放に言葉を使いますが、必ず根拠があり、その優れた語感を活かしております。

拙歌付帯

父茂吉の御骨尊み自らに祀りみき北杜夫われは尊む 令和四年五月宝泉寺墓苑

宝泉寺茂吉の墓に今はじき人の思ひに納骨をしき山頂のあたりが生えて蔵王より顕つ虹明るし今日 のつれづれ

茂吉入門（抄録）

上市市の市報「かみのやま」（令和四年四月号）令和五年三月号）に斎藤茂吉生誕一四〇年記念特別企画「茂吉入門／その魅力その偉大さ」全十二回を連

載しましたので、その内容を取りまとめて紹介いたします。

第1回 斎藤茂吉という人(1)

明治二十九年、十四歳の少年茂吉は東京で病院経営をする斎藤紀一の後継者になるため上京して、開成中学、一高、東京帝国大学医科大学へ進学しやがて、医学博士となります。それとともに日本固有の文学である短歌の道をすすみ、大歌人となりました。

第2回 斎藤茂吉という人(2)

茂吉は医家を後継する立場でしたが、短歌に惹かれていったのは兄や故郷の恩師に宛てた手紙で自分の思いを端的に伝えるため短歌を作り、また親友から俳句や短歌の教えを受けたのがきっかけでした。その後、正岡子規の短歌革新を継承する短歌会に入り、作歌が本格化しました。

第3回 幸田露伴と茂吉

茂吉は生涯で多くの文人と交流しましたが、茂吉は中学時代に幸田露伴の小説を愛読し、昭和九年に初めて出会ってからは様々な教えを受けました。戦時中、茂吉は幸田家に生活物資など援助したため、娘の幸田文が茂吉に宛てた札状も残っています。

第4回 茂吉の聖地 山形・上山

十四歳で親元を離れ、東京で生活した少年茂吉の精神的な苦勞は大変なものだったに違いありません。山形訛りを笑われることもありましたが、よく勉強して一流の精神科医になります。また、万葉以来の大歌人となりました。もともと天才的な素質があったのですが、この精神的エネルギーはふるさと山形・上山の

豊かな自然や人情があったことを、忘れてはならないと思うのです。

第5回 蔵王と茂吉

ふるさと上山に蔵王連峰が身近に聳えていたことは、茂吉のような天性に恵まれた芸術家・抒情歌人にとってかけがえのない好運であり宝です。昭和九年、茂吉の実弟が兄茂吉の業績を讃えるため、蔵王熊野岳山頂に歌碑を建てました。当初茂吉は建立に反対しましたが、弟の熱意により歌碑のために「陸奥をふたわけさまに聳えたまふ蔵王の山の雲の中に立つ」という歌を作ったのです。

第6回 茂吉の蔵王歌碑行

茂吉は昭和十四年に初めて蔵王山頂の歌碑を目にしました。当初、建立を許可せず完成後も見に行くのを渋ったのは、当時の歌碑建立ブームというような気風の一部から批判が高まっていたためでした。現在、斎藤茂吉歌碑は全国に一六〇基以上ありますが、茂吉が許可したのはこの蔵王山頂歌碑の一基だけです。

第7回 茂吉のエピソード

晩年の茂吉にはエピソードがたくさんあります。その一つが長男の茂太さんの結婚が決まり、両家顔合わせの食事が鰻料理店で行われ、花嫁と茂吉が並んで座ったときのことです。和服と緊張で鰻に箸をつけたものの食べられずにいた花嫁に、茂吉は「それを僕にちょうだい」と言っただけと食ってしまったそうです。

第8回 茂吉の言葉の使い方

茂吉の短歌は視野が広く、自由自在にあらゆることを歌にしましたので、読むとどの歌も面白い。(最上川

逆白波のたつまでにはふぶくゆふふとなりけるかも」という歌のように、吹雪の最上川を詠ってこれほど堂々とした作品は他にありません。特に「逆白波」という表現は茂吉が作った言葉です。逆波と白波の激しい最上川を鮮やかに表しています。

第9回 冬休みはぜひ茂吉記念館へ

斎藤茂吉記念館の所蔵品は日本随一のものでありますし、世界に誇れるものです。常設展をはじめ、特別展なども魅力的です。

第10回 茂吉の新年賀歌

賀歌は「がが」と読みます。茂吉が歌壇の中心になるにつれて新聞・雑誌の各社が賀歌を注文し、多くの新年の歌が残っております。茂吉は新年の歌を上山や戦後大石田で多く作りました。茂吉にとって生地上山市・山形県は歌の源泉であったのです。

第11回 図録のすすめ

茂吉の偉大さ、魅力、奥深さ、親しさ等には、茂吉記念館をこまめにうかがう、図録を精読して展示を振り返っていただくのも楽しいことです。

第12回 長男・茂太博士の茂吉論

家族と家庭にいるときの茂吉は頼もしい存在であると共に、雷を落とすこわい父親でもあったようです。しかし、その中で長男・茂太さんの茂吉観は常に温かく本質を捉えています。茂太さんも同じ医学博士であり、世界旅行を多くした、視野の広い人でしたから茂吉についても本質的な理解を示しておられます。

■執筆 四郎(あきはしろう) 編集 歌人

講座事業

■公開講座

学芸及び文化振興のための普及事業として公開講座を実施しました。令和四年度の上山市の市報「かみのやま」に連載(全十二回)された斎藤茂吉生誕一四〇年記念特別企画「茂吉入門／その魅力と偉大さ」の掲載内容を主なテーマに、執筆者の館長が講師を務めました。また、講座終了後に館内特別展の作品解説(ギャラリートーク)も合わせて行いました。

□茂吉入門／第一回

日時：令和五年六月十一日(日)午後一時三十分～午後二時三十分(開場：午後一時)

会場：斎藤茂吉記念館内集會室

運営協力(司会等)：山川ひろみ氏(山形県歌人クラブ副会長・事務局長)／「歩道」

参加者：四十名

参加費：斎藤茂吉記念館入館料

※ギャラリートーク・館内見学：午後三時から三十分間程度・館内守谷夫妻記念室等(地階)

□茂吉入門／第二回

日時：令和五年十一月十二日(日)午後一時三十分～午後二時三十分(開場：午後一時)

会場：斎藤茂吉記念館内集會室

運営協力(司会等)：山川ひろみ氏(山形県歌人クラブ副会長・事務局長)／「歩道」

参加者：三十名

参加費：斎藤茂吉記念館入館料
※ギャラリートーク・館内見学：午後三時から三十分間程度・館内守谷夫妻記念室等

■出張(出前)講座

諸団体から講師の派遣要請を受け、職員を講師として派遣しました。

□斎藤茂吉記念第三十回中川町短歌フェスティバル二〇二三

日時：令和五年十月八日(日)午後一時～午後四時

会場：中川町生涯学習センターちやいむ(北海道)

派遣講師：五十嵐善隆(業務係主事兼学芸員)
演題：「斎藤茂吉の北海道―そしていくつかの小話、茂吉の最新研究からネット上のデマまで」

参加者：五十名



講師の派遣 中川町生涯学習センターちやいむ(北海道)にて

特別展

■斎藤茂吉没後七十周年特別展「MOKICHI・壮年から晩年までを振り返る」

茂吉没後七十周年の節目にあたり、斎藤茂吉の壮年から晩年・逝去に至るまでの様子と、その時々的心情等を表した作品・資料を展示しました。没後刊行の遺歌集・全集等をおして、歌人・文学者として数々の業績を示した茂吉を紹介しました。／会期：令和五年四月二十九日(土)から同年八月三十日(木)

■「写真と絵画で観る斎藤茂吉」

斎藤茂吉は短歌の創作に繋がる絵画に関心を寄せました。茂吉の作歌姿勢と人となりの魅力について理解を深めてもらうため、親しみながら描いた作品と茂吉をモデルにした肖像写真・肖像画等を合わせて展示しました。／会期：令和五年九月十六日(土)から令和六年三月三十一日(日)



特別展「MOKICHI- 壮年から晩年までを振り返る」
展示会場(館内守谷夫妻記念室)

収蔵資料から 「円山応挙「河柳鶴図」模写」

令和五年度特別展「写真と絵画で観る斎藤茂吉展」(以下本展)において、斎藤茂吉による円山応挙の鶴の絵の模写が描かれた手帳№45を展示しましたが、これまで不明だった元の絵が円山応挙「河柳鶴図(柳鶴)」であることを確認しましたので、その経緯と関連事項を合わせてご紹介いたします。

昭和十四年四月九日、株式会社東京美術倶楽部で行われた橋本家御蔵品入札会の売立下見に茂吉が足を運び、出品されていた円山応挙「河柳鶴図」(柳鶴)を模写したもので(※本誌表紙参照)、この模写は全集にも掲載されています。

一般的に斎藤茂吉は二つの時期に絵を描いたとされ、それぞれ作品を残しています。幼年期故郷で生活した折に残した雑然とした風船絵等と、晩年期大石田で生活した時期を中心とした植物等の静物画です。茂吉の絵画作品について語る上で、短歌に出会う以前の幼年期の絵画作品もさることながら、晩年期の絵画作品が目されるのは傑作と称される歌集『白き山』と同時期に制作されたためでしょう。

また、茂吉は絵画などの芸術作品の鑑賞には、作歌姿勢とした写生という考え方、実相観入とも言い表した独自の判断基準をその評価にも照らし合わせていました。そして、その作品理解のため手帳に略図やポンチ絵をいくつも残しています。特にヨーロッパ留学中の手帳№13の表紙には「ポンチ絵ノ句等」と記し、ゴッホ「ひまわり」をはじめとして多くの略図を描いており、このときの経験が昭和十三年一月から十七年十二月までの五年間に、歌誌「アララギ」表紙に用いられた西洋

画や彫刻の写真計六十点分の作品解説の執筆につながりました。

さて、この円山応挙の鶴の印象を茂吉は次のように記しています。

鶴の嘴から眼、面あたりは、応挙のいつもの遠者な筆触に似ず、丁寧に写生帖に写したというふうな気持の真面目があつて、線のふるふるとあるところなどもあり羽毛の筆触でも、趾のみづかきでも、力にまかせてなぐりがきせず、力を惜しんで、それを奥に籠らせるといふ行き方のやうである。

「応挙の柳鶴」(アララギ)昭和十四年七月号)これは昭和十年一月号から二十一年六月号まで「アララギ」に連載された随筆「童馬山房夜話」の一つです。この連載は表紙絵解説とは異なり毎号様々な事柄をテーマにしており、この号では売立下見で見た鶴が印象に残ったため執筆したものとされます。なお、右記の茂吉の応挙評については当館前館長の片野達郎氏が詳しく述べています。

茂吉は応挙評を書く前段として売立下見の会場で模写しましたが、絵全体の略図ではなく画面のごく一部だけを緻密に模写した点について述べたいと思います。

昭和十年頃、茂吉が頼繁に東京美術倶楽部に足を運んでいたことを高弟の佐藤佐太郎が証言していますが、この時期に略図ではない緻密な模写はこの鶴図スケッチのほかに見当たりません。この時の売立には円山応挙以外にも立原杏所「仙客訪友図」や渡辺崋山「秋弁雙鷺図」等の写生を重視した絵師の作品もありましたが、この時の茂吉が心惹かれ、絵心が動いたのは応挙の鶴図だけだったようです。

茂吉はその鶴の顔を(上)嘴と下嘴の合ふところに、口中粘膜が薄紅く少し見えてみるが、そのへんの皺の筆触なども、まことに人の心を落着かしめるところがあ

る。とも評しています。鶴の口中は茂吉の指挿通り薄紅色をしています。画面中ではほんの一部分に過ぎませんが、上下の嘴が黄色く着色されているにも関わらず、強く茂吉の琴線に触れたのは口中の薄紅色と皺の筆触だったようです。絵全体ではなく、ごく一部分に注目し、そこに(人の心を落着かしめ)られたとするところに茂吉という人独特の感覚があったともいえるでしょう。

これに類似する歌として、筆者が思い浮かべるのは
もろもろは裸になれと衣割くひとりの婆の口赤き
ところ

『赤光』(初版)「地獄極楽図」という一首です。この歌は茂吉が幼少期に生家菩提寺で目にした「地獄極楽図」(宝泉寺蔵)全十一地点中一点に含まれる舞衣婆の図を詠んだ歌です。この舞衣婆の唇は赤く口元は皺が多く描かれていますが、鶴と同様に画面中のごく一部分にすぎません。もちろん応挙の鶴と地獄絵図の舞衣婆を目にした感動が茂吉において同一だったとは言えませんが、この鶴の短歌を茂吉は残していませんから比較することもできませんが、絵画を目にしたときの茂吉独特の感覚を考えると、示唆的だと思えます。

本資料は本展会期中の令和六年三月三十一日までご覧いただけます。

※円山応挙の本作品の名称について、「円山応挙研究 図版(画集)二(平成十一年、京都新聞社)では「河柳鶴図」と称されていますが、出品目録「橋本家御蔵品入札」では「柳鶴」と記され、斎藤茂吉もその認識をとっています。

※参考資料
・片野達郎「斎藤茂吉のヴァン・ゴッホ」歌人と西洋絵画との邂逅(昭和六十二年、講談社)
・佐藤佐太郎「茂吉先生と絵」(『斎藤茂吉全画集』昭和四十四年中央公論美術出版)

※協力・画像提供:株式会社東京美術倶楽部
■ 斎藤茂吉主事兼学芸員 五十嵐寿雄

短信 (掲示板)

◆広報・教育普及活動等

◆蔵王第二小学校「あかね館」リーフレット

斎藤茂吉の母校である堀田村半郷尋常小学校、現在の山形市立蔵王第二小学校の同窓会は校内の斎藤茂吉コーナー「あかね館」のリーフレットを作成されましたが、当館は画像提供等を行いました。あかね館についてのお問合せは同校023-688-2565にお願います。

◆「上山を短歌のメッカに 茂吉のふるさと上山創生の会」のパネル

上山ロータリークラブ(RO)が発案し、「上山を短歌のメッカに 茂吉のふるさと上山創生の会」が発足しました。同会は斎藤茂吉をテーマにしたパネルを作成していますが、当館は画像及び資料の提供等を行いました。パネルについてのお問合せは同団体事務局の上山023-673-5959にお願います。

◆みちのおくの芸術祭山形ヒェンナー2024

令和五年十月十九日、小金沢智氏(東北芸術工科大学美術館大学センター 研究員美術科日本画コース 講師)が、令和六年九月に蔵王温泉を会場として開催予定の「みちのおくの芸術祭山形ヒェンナー2024」について説明するため来館されました。当館は、蔵王温泉各地の斎藤茂吉歌碑と短歌作品を合わせた展示

ふるさと納税

上山市ふるさと納税制度のご活用による控除が受けられます。また、斎藤茂吉記念館提供によるオリジナルグッズの返礼品があります。

上山市ふるさと納税

検索

方法等についての助言及び当館資料の貸出手続きについて説明を行いました。

◆大瀧保評議員の斎藤茂吉文化賞受賞

大瀧保評議員(山形県歌人クラブ名誉会長)は、令和五年度の斎藤茂吉文化賞を文学(短歌)の分野において受賞されました。斎藤茂吉文化賞は昭和三十年に斎藤茂吉の偉業を偲び、山形県が創設しました。選考する機関を斎藤茂吉文化賞委員会といい、知事を委員長とする学識経験者で構成されています。

◆斎藤茂吉記念館評議員の選任

公益財団法人斎藤茂吉記念館評議員会が令和五年六月二十七日に上山市役所において開催され、横戸長兵衛氏、長澤長右衛門氏の退任に伴い、山本幸靖氏、大沢芳明氏が選任されました。任期は前任者の残任期間で、令和六年六月までとなります。

「友の会」ご入会・「活動支援募金」のご案内

●友の会

友の会会費は、当財団が実施する公益目的事業全般の充実に活用します。

- ◎賛助・維持会員(対象:個人・法人・団体)
年会費1口10,000円(会員証で10名まで無料入館)
- ◎一般会員(対象:個人)
○蔵王会員 年会費1口5,000円(会員証で5名まで無料入館)
○最上川会員 年会費1口3,000円(会員証で3名まで無料入館)
○学生会員 年会費1口1,000円(会員証で本人のみ無料入館)
※友の会は入会日より1年間有効です。

●活動支援募金

活動支援募金に対する寄付金は資料の修復、複製資料の製作や記念館の設備更新等費用の一部として活用します。

- 法人・団体等 1口10,000円
- 個人 1口5,000円

※「友の会・活動支援募金」とも、何口でも結構です。
※ご入会・ご寄付ご希望の方は当館までお問合わせください。

◆斎藤茂吉記念全国大会事業見直し

令和五年六月三十日に第五十一回以降の斎藤茂吉記念全国大会事業の見直しについて主催者間で意見交換を行いました。また、九月二十六日に第五十回斎藤茂吉記念全国大会運営委員会を行い運営委員と主催者で大会事業の見直しについて協議しました。次年度も関連団体とともに協議を重ねていくことにしています。

◆改正博物館法に伴う登録博物館山形第一号

改正博物館法が令和五年四月一日に施行され、それに伴い八月十七日付けで山形県教育委員会に対し博物館登録申請を行いました。九月二十六日に審査員四名、学識経験者一名、県担当職員一名が現地調査のため来館されました。十月十九日付けで同会より山形第一号として登録されました。

◆編集後記

本紙二十六号は、投後七十年周年第四十九回斎藤茂吉記念全国大会の記念展覧会第一部「晩年の斎藤茂吉とその短歌」の概要を中心に掲載しました。本年は斎藤茂吉投後七十年にあたり、関連行事を実施いたしました。また茂吉研究の向上につながるきわめて重要な資料と作品の寄贈・寄託がありました。これは茂吉の遺族・親族をはじめとする関係各位のご厚意によるもので、大変有難く存じます。その新資料は次年度以降に公開の予定です。

(編集担当 五十嵐)

- ◆利用案内
- 開館時間 9:00~17:00(入館受付16:45まで)
- 休館日 毎週水曜日(祝日・休日の場合は翌日)
7月第2週の7日間・12月28日~翌年1月3日
- 入館料 一般:大人600円・学生300円・小人100円
団体:大人500円・学生250円・小人50円
※学生:高・大学生 小人:小・中学生
※団体10名様以上 ※障がい者割引(団体料金適用)
- 音声ガイド 300円(英語版有)
- ◆交通案内
- お車でお越しの方(※無料駐車場有:普通車70台/大型車5台)
・東北中央自動車かみのやま温泉ICから市内方面20分
- 電車でお越しの方
・JR奥羽本線「かみのやま温泉駅」からタクシー10分
・JR奥羽本線「茂吉記念館前駅」下車徒歩3分